

やっぱり大相撲観戦雑記  
＜平成 23 年秋場所を終わって＞

「白鵬が 20 回目の優勝」「琴奨菊が大関昇進」という大きな実績を残し、さらに「稀勢の里 来場所大関に挑戦か」という話題とともに来場所以降に繋がる新しい動きを記した実りのある場所だった。テレビ観戦から見て気が付いたことを羅列してみたい。

＜1＞ 白鵬 20 回目の優勝

「素早い踏み込みで短時間に攻め勝つ」相撲で中盤戦までは安定した取り口で独走を感じさせた。前場所はこの取り口のほかに「相手に充分にとらせながら、手際良くそれを封じて行く」取り口も数多く見られたが、今場所はなかった。後半戦に入ってから絶好調の両関脇に破れてしまい、あわや優勝決定戦かという展開になったが、終わって見れば 20 回目の優勝となった。

対稀勢の里戦は、「白鵬の右を如何にして殺すか」にこだわった稀勢の里の研究成果と見た。この一戦で白鵬は最後までまわしをつかんだ手を離さなかったために、小手に振られて腕を痛めたと思われる。しかも我慢の限界になってあわてて手を離したために大きく投げ飛ばされるような形になってしまった。

対琴奨菊戦は、「対稀勢の里戦の影響が腕に残っていたのでは？」とも感じられた。この二人の関脇に破れて以降は苦労して勝つ相撲が多かったようなので、尾を引いていたものと思う。それでも優勝にこぎつけたのは白鵬自身の力ではあろうが、不甲斐ない大関達の力にもよるかもしれない。

結果として史上 6 人しか達成していない「優勝回数 20 回以上」の大横綱のレベルに入った。確かにこの領域に達した横綱の安定した相撲ぶりと比して決してひけをとらない内容の大横綱である。

＜2＞ 琴奨菊の大関昇進への挑戦

「三場所で 33 勝すれば・・・」が先行し過ぎている大関昇進、しかし現実にはそうは甘くない。直前三場所の数字の遊びだけではなく「より一層中身を吟味」しなければならない。

今場所の取り口には安定性と同時に強さが感じられた。重心の低い立ち合い姿勢・低い位置での前進。まわしに拘るよりも前進に力を注ぎ、機を見れば低い位置からのがぶり寄り。琴奨菊としての相撲の型が土俵上を走り続けた。自信をもって相撲を取れるようになってきたことから、従来から悪い癖だった時間いっぱいでの「立ちしぶり」も改善されてきた。

琴奨菊のここ一年余りの成績は下表のとおり。(直前三場所=33 勝 12 敗 直前六場所=62 勝 28 敗)

「日本人大関の出現」を喜ぶ人もいるが、それ以上に「安定した成績を残せる大関」として期待したい。

H22/7 月	H22/9 月	H22/11 月	H23/1 月	H23/5 月	H23/7 月	H23/9 月
5-10 (関脇)	9-6 (前頭 3)	9-6 (前頭 1)	11-4 (関脇)	10-5 (関脇)	11-4 (関脇)	12-3 (関脇)

＜3＞ 変身したか稀勢の里

マスコミ・相撲関係者などの間で「琴奨菊・稀勢の里・鶴竜の大関とり」と騒ぎ立て、小煩い状況にあった。私の認識としては、「稀勢の里はこの二場所が勝負時」ではあるが、「鶴竜はまだ議論の対象外」である。稀勢の里は平成 18 年 7 月場所で新小結に昇進して 8 勝 7 敗の成績を収めた。この時は三場所にわたってこの地位を維持したが、これを皮切りに何度か三役の地位を経験している。この一年の相撲内容から見て、今場所の成績次第では来場所に昇進がかかるかもしれないと注目していた。

稀勢の里の相撲は今場所大きく変わった。低い立ち合いと脇を固めた前傾姿勢での寄り身、まわしに拘ることなく左右のおっつけを効かせながらの前進には迫力があつた。これが求めていた自分の型であることに自信を付けたに違いない。この相撲が安定して何場所も続けられるようであれば大関どころかさらにその上の地位さえ射程内に入ってくると思われる。

鶴竜については前述の通りだが、正攻法の相撲で前さばきは抜群だし、勝ち相撲を見る限りでは着実に力を付けている。稀勢の里の後を追う可能性は充分にある。

二人の戦績（下表）と前項の表（琴奨菊の戦績）とを合わせて見ると、色々なものが見えてくる。

	H22/9月	H22/11月	H23/1月	H23/5月	H23/7月	H23/9月
稀勢の里	7-8 (小結)	10-5 (前頭1)	11-4 (関脇)	8-7 (関脇)	10-5 (関脇)	12-3 (関脇)
鶴竜	9-6 (小結)	7-8 (関脇)	8-7 (小結)	12-3 (小結)	10-5 (関脇)	9-6 (関脇)

#### <4>大関は身の危険を感じているか

「日馬富士の綱取り」と騒ぎ立てた人が多いが、場所前の私の見解では「内容的に時期尚早」。前場所に書いた駄文「またまたしつこく大相撲観戦雑記 ～平成 23 年夏場所を終わって～」で既に述べているのでここでは多くは語らないことにする。結果として今場所は勝ち越すのがやつの状態だったことから、私の危惧と予測は当たっていたことになる。日馬富士の戦績は下表のとおり。

H22/7月	H22/9月	H22/11月	H23/1月	H23/5月	H23/7月	H23/9月
10-5	8-7	0-4-11休	8-7	10-5	14-1	8-7

琴歐洲は腰高でモタモタ、フワフワした取り口ばかりで、1勝しか挙げられずに途中休場となった。大関候補と言われる力士達の成績と同じデータでまとめて見ると、「直前三場所=13勝20敗12休」であり

「直前六場所=41勝37敗12休 勝率0.4556」である。

負け越しと勝ち越しを繰り返すだけでマンネリ化している大関陣の中に割って入り、大きな変革の糸口になるか？と期待された把瑠都もこのところ伸び悩んでいる。腰高で、上や横から長い腕をぶんまわしてまわしを取るスタイルから抜け出せず、相撲の型に成長が伺えない。白鵬戦で善戦したとはいえ腕力で相撲を取ったにすぎず、このままで行けばふたたび怪我をし、そしてクンロク大関（ハチナナか？）の仲間入りは免れないだろう。

「少横綱・多大関」の状態を作ることにより、弱い大関が居座ることになり将来に向けて大きな問題となる。相撲協会が処すべき「相撲改革」の重要な課題のひとつが「大関昇進基準」と「大関からの降格基準」の見直しであることに協会が気づいていないことが最も大きな問題点と言える。

#### <5>次の世代とその次の世代そして・・・

この場所は豊真将・豪栄道・栃ノ若・北太樹の相撲が光っていた。

攻めの力を実感させた先場所に続いて豊真将はさらなる進化を遂げた。立ち合いの突進力と攻撃力が備わり、これまでに培ってきた低い安定した姿勢の守備に注力した相撲から攻撃型の相撲に変化してきた。先場所の変身ぶりは本物だったと感じさせる今場所の土俵だった。東前頭筆頭で10勝5敗の好成績を上げながら三賞のどこにも引っかけなかったのは意外だった。

豪栄道は前半もたつき気味だったが、後半になると尻上がりによくなってきた。従来から課題とされていた立ち合いの勢いと攻めのスピードが改善されて復活を感じさせたが、引きや叩きによる勝利が何番かあり少々気になった。

新入幕から三場所で七枚目に躍進した栃ノ若の成長が目立った。長身で懐が深いにもかかわらず、それを武器にせず重心を低くして下から攻めて行くきれいな相撲は将来性を感じる。大柄ながら柔軟な体つきは往年の名力士大鵬や大麒麟の再来を感じさせる。9勝6敗と目立つ成績ではなかったが、少しずつ進化していることを感じさせる力士の内のひとりである。

北太樹は後半戦で上位と当てられて黒星が重なり10勝5敗に終わった。しかし、正攻法の相撲に「機を見るに敏」を絵にしたような手際の良いスピード相撲を取り、「型のある力士」の代表格であろう。

巨漢臥牙丸が好成績を上げて敢闘賞を受賞したが、体の大きさだけを利用した相撲でどこまで進めるかは未知数である。早い内に相撲の基本をマスターしないといけない。

37歳の旭天鵬・33歳の安美錦などの中堅やベテランの力士の活躍もあり場所を盛り上げたが、一方では升ノ山・富士東・高安などの最近入幕したばかりの若手の活躍が見られず残念だった。誰がいつ壁を突破してくるのかも今後の楽しみのひとつである。

## < 6 > 三賞の行方

殊勲賞＝稀勢の里・琴奨菊 技能賞＝琴奨菊 敢闘賞＝臥牙丸 という結果になった。この場所の様々な展開を振り返ると、殊勲賞と技能賞については概ね納得できる所であるが、敢闘賞については少々吟味が不足しているような気がしないでもない。

37歳ながら若々しい土俵を見せてくれた旭天鵬（11勝4敗）、正攻法でけれんのないきれいな相撲の北太樹（10勝5敗）や豊真将（10勝5敗）などにも敢闘賞があっても・・・と思った。

三賞は相撲記者クラブによる選考なので、「マスコミが捉えた今場所」という視点になるのでどうしても地味な者よりニュースバリューのある派手な者に目が行くのは致し方ないことなのだろうか。

## < 7 > お客さまアンケート

相撲協会が行ったお客様アンケートは興味深い企画だった。毎日の十両以上の全取り組みで両力士に対して健闘度合いを評価して採点するというもので、毎日その日のベスト3を公表しようというもの。

これまで相撲協会が一切手を付けていなかった「観客の評価の可視化」という新しい試みで、私としては大いに期待した。

相撲協会は結果を毎日公表していたが、ホームページ上だけだったのでインターネットに無縁な人には見えないものだった。公表された情報を「一般の人が見える形にする」というマスコミの役割が果たされたのは千秋楽が終わった翌日の新聞が初めてだった。新聞紙上で毎日公表して多くの人が関心を持つものにするべきだったと思う。

公表された「毎日の健闘力士ベスト3」は、勝敗とは関係なく「土俵上の一戦を通じて観客の視点で見えたもの」として大変分かりやすいものになった。毎日の全取り組みを見ていると、なるほどと頷くことができる結果になっていた。

しかしながら、せっかく始めた新しいアイデアにも少々配慮不足があった。そのひとつは前述の「公表のしかた」であり、もうひとつは「出た結果の活用法」である。

客観的な評価データから、相撲協会として「特別賞」としてインセンティブプランに加えるとか、力士の給与に「加算金・減算金」として反映するなどの仕組みを作って各力士に結果がフィードバックされる必要がある。この結果を受けた各力士が一層の奮起・健闘をし、相撲全体の盛り上がりにつながるということで、この仕組みが効果をもたらしたことになる。ただアンケート・採点・結果公表だけで終わるのならば、面白いだけであまり意味がないので、止めた方が良く思う。

以上